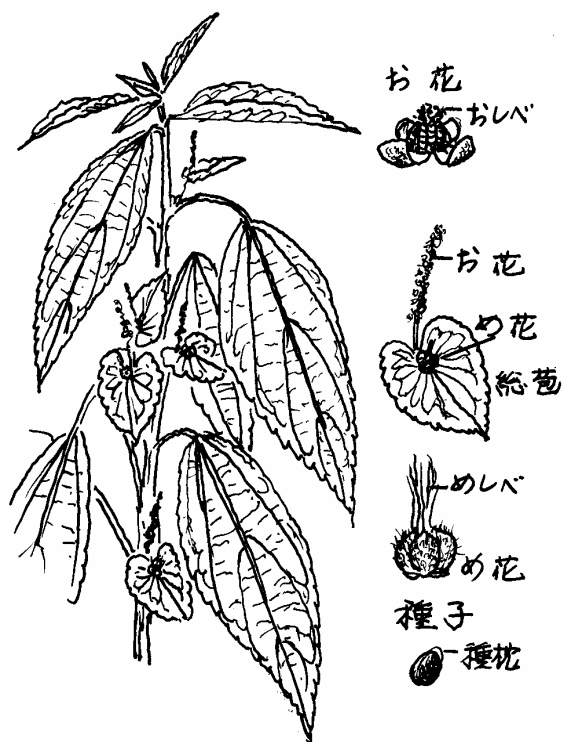


季節の観察メモ

エノキグサ より確実に

2004 年 7 月 15 日



道端などに見られるごく普通の一年草。葉の形・色・艶・葉脈までエノキにそっくり、名づけてエノキグサです。しかし、エノキはニレ科、エノキグサはトウダイグサ科で、全くの他人の空似です。トウダイグサ科は、トウダイグサやノウルシなど、皿のような総苞の上に花が乗っていて、ちょうど燭台に蠟燭を立てたような形です。エノキグサのこの総苞

は特異な形をしていて、ちょうど二

つ折りにした編笠のようです。
そのため、アミガサソウとも呼ばれてい ます。

エノキグサは雄花と雌花が別々で、編笠の中から細い花穂が立って砂粒より小さな丸い雄花がびっしりついていきます。4 枚の花被(がく)も小さく、虫眼鏡でないと見えません。一方雌花の方は、雄花の花穂の根元、編笠の折り目の所に 1~3 個ほど乗っています。花被は 3 枚、めしべの先は毛のように割れています。開花し花粉が熟す頃、雄花はパラパラと編笠の上に散り、中心の雌花の所に転がっていきます。そして花粉が直接めしべにつく仕組みになっているとのことです。

植物には、閉鎖花や受粉できなかった最後の手段としておしべとめしべを接触して受粉するものもありますが、なるべくこうした自花受粉を避けています。雄花・雌花と別々の単性花にしたり、おしべ・めしべの熟す時期をずらしたり、また、風媒花・水媒花・動物媒花などの方法で、他の花の花粉で受粉しようとしています。

熟した雄花が転げ落ちて雌花に接触するといった、重力を利用したエノキグサの確実な受粉方法にはただただ驚嘆させられます。

それにしても、せっかく雄花・雌花に分けたのです。風や虫による受粉はしてないのでしょうか。あまり、虫が寄っている様子は見られませんが（篠原 智男）。